



1994.6.1 No. **11**

For Revolutionary Resistance

300円

A.R.P

ARP
P.O.Box 57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN

FAX +81/75-781-1253

ドイツのクルド人弾圧に抗議し ネヴロズ蜂起/ 焼身決起で3人死亡



3月21日、ネヴロズの日に焼身決起し、死亡したロナーヒ（左）とベリファン（右）



ネヴロズ蜂起で自らをネヴロズの炎とする参加者たち

〈今号の内容〉

〈クルディスタン〉

★この炎を絶やさせてはならない

～焼身決起したクルド女性たちの遺書

★ネヴロズは抑圧に対する闘いである／ERNK声明

★解説／ドイツ全土で行なわれた戦闘的ネヴロズ行動

★クルディスタン情報センター新年声明

★クルディスタン・レポート

★ビルギット・ホーゲフェルト（ドイツ赤軍派）の書簡

★和平交渉におけるEZLNの要求項目（全文）

★センデロ・ルミノソ、年末年始の大攻勢

など

この炎を絶やさせてはならない

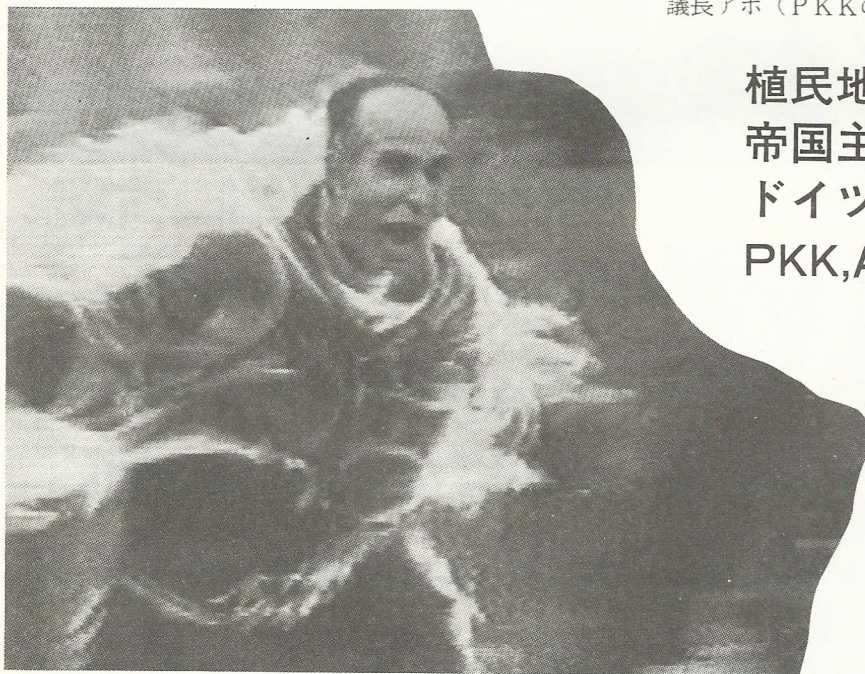
ーネヴロズの日に焼身決起し死亡したクルド女性の遺書ー

この遺書は、ドイツでの戦闘的ネヴロズ（クルディスタンの正月／3月21日）行動期間中の3月21日に焼身決起したPKKの支持者、ベリファン（ニルギュン・イルディリム）とロナーヒ（ベドリエ・タシュ）によって書かれたものである。

ドイツ政府は、最近ことさらにクルド人民への敵意をあらわにしています。私たちの組織は閉鎖され、伝統的な特色や旗は禁止されてしまっています。そしてたくさんの方々のクルドの愛国者たちが逮捕、投獄されているのです。これによって、ドイツはレイシスト国家トルコと同じ道をたどりつつあります。ドイツは、「クルド人を全滅させる」と公言した（トルコの）チルレル首相、デミレル大統領、グレス参謀長らの（クルド人）大虐殺計画を支援しているのです。

彼らはこの「卑劣な戦争」が続くことを望んでいるのです。彼らは皆、クルド人を一掃せんとする試みを支えています。大虐殺は、ドイツ製の武器によって遂行されているのです。

ドイツは、シズレ、シルナック、ディヤルバキル、そして多くのクルドの街で行われた大虐殺と暴力の共犯者なのです。これに関して、ドイツ国家は、人道に対する犯罪を犯しています。彼らは、この代償を払うこととなるでしょう。



ネヴロズ蜂起の参加者のうち6人がガソリンをかぶり、自ら火をつけて、ネヴロズの炎をともした。

ディヤルバキル刑務所のマズルム・ドーガンは、3本のマッチで自らに火を放ち、それによって平和への道を印しました。人々は、ネヴロズの炎をともしることによって、この呼びかけに応えました。ファハトとゼキエ・アルカンはこれに続き、ディヤルバキルをとりまく壁の上で自らを燃やしたのです。あらんかぎりの誉れと尊敬をもって、私たちは彼らに想いを馳せます。彼らは私たちの闘いの英雄なのです。今、私たちは、彼らから旗を引き継ぎ、いつの日か必ず、平和と自由の下にこの旗がひるがえることを確信しています。私たちは、自身の意志と自由をもってネクミに続きます。ネクミは言いました。「この炎を絶やさせてはならない」と。私たち自身を燃やすことが、帝国主義と植民地主義への最善の回答であるのです。

昨夜、カンター内相（ドイツ）は、テレビでこう言っていました。「今後、PKKに対する我々の立場は、より一層厳しいものとなる。PKKは、どこにおいても自由に活動することは出来ないことを思い知るだろう」。これらの言葉は、私たちの決意を強めました。私たちは理解し、確信しています。私たちによってともされた自由の輝きが、必ずやより大きな炎を燃やすだろうことを。私たちは、この思想と身体をクルド人民と全人類に捧げます。

自由への戦いで倒れた人々と、独立と統一クルディスタンを求めて戦う人々に挨拶を送ります。そして我らの議長アポ（PKKのオジャラン総書記の愛称）へ。

**植民地主義打倒！
帝国主義打倒！
ドイツの排外主義打倒！
PKK, ARGK**

**ERNK万歳！
議長アポ万歳！**

ニルギュン・イルディリム
(ベリファン)

ベドリエ・タシュ
(ロナーヒ)

ネヴロズは抑圧に対する闘いである

クルド民族の祝祭、ネヴロズは紀元 612年 3月21日、アッシリアの専制支配者ダハクに対し、人民が怒りの炎を燃え上がらせ、王宮から追放したことに始まる。民衆はこの日を熱烈に祝ったのだった。

クルド労働者党(PKK)による最初のネヴロズの炎は、1982年ディヤルバキルの獄中で燃え上がった。これは重要な意味をもつ闘いであった。

今やこのネヴロズはクルド人民にとって、まさにクルド人民そのものであり、またクルド人の民族性、そして自由のうちにある文化を意味している。世界のどこであろうとも、クルド人の暮らす場所では、その歴史において3月21日には必ずネヴロズの火が灯され、独自の位置を確保し続けてきた。これらネヴロズの炎は、毎年新たに灯され、自由クルディスタンの下に燃え上がるのだ。

ネヴロズ、この日が近づくと敵は悪夢にうなされることとなる。敵はパニックに陥るのだ。トルコ国家の側にある者も同様にパニックに陥り、このネヴロズ祝祭の禁止を呼びかけている。ドイツによる「ネヴロズ祝祭禁止措置」は、セルヒルダン(民衆蜂起)をもたらすであろう。

ドイツの下した「禁止措置」は、クルド民族のアイデンティティーの拒絶を意味している。他のヨーロッパ諸国では、この民族的祝祭が平和的に祝われているにもかかわらずドイツではこれを祝うことができない。ドイツに暮らすクルド人はなぜゆえに「テロリスト」として扱われているのか。ドイツ在住のクルド人たちは、自分たちの伝統行事をただ祝いたいだけであるのに。

ネヴロズを祝う集いへと向かったバスは次々に警察当局によって強制的に止められていった。厳重な身元確認、身体検査がなされ、逮捕拘束の命令さえ下されていた。

ドイツは、クルド民族を示すもの、旗や統一の象徴などの一切を禁止した。これは長年にわたってトルコ国家がおこなってきたこととまったく同じである。世界各地の何万ものクルド人がPKKによって固く結ばれているというのは周知の事実である。PKKがクルディスタンにおいて、最初の火を灯したからである。この事実を拒否することは、すなわちクルド人民そのものを拒否するということである。

トルコ国家にとっては、村々の監視警備役人たちの絶えまない「努力」でクルド人は一掃されたため、クルド人は自らのアイデンティティーのためには闘っていないこととなっている。ドイツはクルド人の存在を認めて敬意を表明しはしたが、これはPKKに対してではなかった。トルコ国家が、PKKとクルド人が不可分のものであるという現実を目を閉ざしているのと同様に、ドイツもまたこのことを黙殺せんとしている。

カンター内相(ドイツ)は「今後、PKKに対しては厳しい取締りを行ない、逮捕されたクルド人は国外追放処分とする」などと脅しをかけた。クルディスタンにお



ける状況をよく知っている者は、この「措置」によりトルコに送還された者がただちに拘束、逮捕され、さらには拷問され処刑される可能性が多にあるのを理解していることであろう。このカンター内相の発言とドイツ政府による(クルド人)敵視政策に抗議して、6人のクルド人が自らの身体に火を放った。うちクルド人女性2人ベリファンとロナーヒ、そしてトルコ人のメスラム・サグラチャ(44)は、その生命を絶つこととなった。

彼らの追悼のための葬送行進は禁止された。警察が行進の阻止線を張り巡らせたにもかかわらず、3月27日、4万人もの人々がマンハイムに集まった。国境が閉鎖され、マンハイムへ向かうアウトバーン高速道では、多くが停止を命じられ警察車輛により追い返された。数千人もの人々がこの葬列への参加を許されなかったのだ。この葬儀に対し警察や軍までもが大量に動員、投入されたことは、あたかもクルド人民に対し戦争宣言が発動されたかのごとくである。

クルド人民に敵意をもって臨むドイツ政府は過去と同じ歴史を繰り返さんとしているのだろうか。ドイツの新世代の多くのヒトラーたちが今、恥ずべき行為でクルド人民へのこのもくろみを成し遂げんとしている。

外国の代表監視団が、ネヴロズと選挙の監視を行なうため、またドイツ製兵器とパンサー装甲車輛配備実態の調査のため、先週クルディスタン入りした。ドイツは、トルコ国家によるクルディスタンでの民衆殺戮を支援している。ドイツはただちに武器援助を停止せねばならない。

クルド民族に対する文化的、政治的アイデンティティーの妨害をもってドイツ政府は、まさにトルコ政府がなしているのと同じように「クルド問題の政治的決着」をもたらそうとしている。

禁止措置と脅迫、そしてクルド人民への敵視政策をもってしては、トルコにおいて見られるのと同様にドイツでもクルド問題への解決などもたらされはしないのだ。

1994年 4月2日

ERNK クルド民族解放戦線

ドイツ全土で闘われた 戦闘的ネヴロズ行動

トルコ東南部（北西クルディスタン）では、トルコ軍によるクルド解放闘争弾圧が続いている。ゲリラ掃討作戦だけではなく、民衆を標的として街ごと全て破壊してしまう熾烈な弾圧であり、文字どおり民族抹殺を狙うトルコ政府の姿勢が浮き彫りになっている。これらの攻撃に使用される武器を主に供給しているのが、ドイツである。PKKの下に解放闘争を闘うクルド人民は、一貫してこのドイツによる援助を糾弾してきた。もちろん、経済的な面では、多くのヨーロッパ諸国がトルコを援助してその戦争経済を支えている。

ヨーロッパ在住のクルド人民は、昨年6月と11月に、ヨーロッパ諸国のトルコ支援に対する抗議として、またトルコ政府のクルド人虐殺攻撃を糾弾するために、ヨーロッパ全域で一斉蜂起しトルコ関連施設を襲撃するなどの行動を展開した。ドイツ政府は、これに強硬姿勢で臨み、PKK、ERNKを初めとするクルド諸組織を禁止した。事務所の閉鎖、旗の使用禁止などの処分がなされ、禁止措置は民族的な伝統にまで及んでいる。

3月21日は、クルディスタンの正月にあたるネヴロズの日である。ドイツ政府は、その祝賀行事さえも禁止して、クルディスタン解放闘争の弾圧をはかってきた。これに対してクルド人民は街頭へ、高速道路へと繰り出し、実力でネヴロズの火を灯して、これをセルヒルダン（民衆蜂起）として貫徹したのであった。

ネヴロズ蜂起は、3月19日から開始された。ドイツ南部の街アウグスブルグでのデモが禁止されたことに抗議して街頭をバリケード封鎖し、火炎ビンを投げるなどして機動隊と激しい攻防が行なわれた。また近く的高速道路をバスで封鎖し、道路、車両にガソリンをまきネヴロズの炎を灯した。警官隊との攻防は9時間続き、その間道路は完全に遮断された。ベルリンでは、大学構内で予定されていた集会が禁止されたため、道路を占拠して抵抗闘争が開始された。戦闘的に闘う仲間を機動隊から防衛するために、参加したクルドの人々は人間の鎖をつくり機動隊の暴力に対抗した。

3月21日ネヴロズ当日は、フランクフルト、ブレーメ



禁止措置に抗議して座り込みをするPKK支持者たち

道路を占拠して、ネヴロズの炎をともし参加者たち



ン、ハンブルグ、ベルリンなど、ドイツ全土でデモと道路封鎖が闘われた。この日は、6人の参加者がガソリンをかぶって火をつけ、自らをネヴロズの炎とすることで闘いの意志を示すこととなった。マンハイムでは、本紙でその遺書を紹介している2人の女性が焼身決起した。彼女らは、昼すぎにライン銀行の敷地の一角でガソリンをかぶり、自ら火をつけたのである。ベリファン（23才）は即死し、ロナーヒ（24才）は重症で病院に運ばれたが23日に死亡した。他にも男性1名が死亡している。闘いは22日も行なわれた。

この闘いに対して、ドイツ政府はさらに強硬姿勢で臨むことを明らかにした。カンター内相は、早くも20日にクルド人の国外追放の方針を発表し、23日の会見では、強制退去を行なうための外国人法の改正に言及している。トルコへ送還されたクルド人は、拷問や処刑の危険にさらされることとなる。このような人権無視の姿勢に対しては、ノーベル平和賞受賞者のツツ司教やダライ・ラマなどが、クルド人弾圧をやめるようにとの声明を発表し、同時にトルコへの国連特使の派遣なども要求している。ドイツ政府の対応は、かえってトルコ政府の人権抑圧の実態を浮き上がらせることとなるだろう。また、クルド人弾圧の非難から逃れるべく、ドイツ政府は焦点となっているトルコへの武器援助の停止を決定した。この決定も、現状ではクルド人追放を正当化するための布石ではない。ロシア政府は、さっそくトルコへの武器援助をドイツに代わって開始し、クルド人が激しい弾圧にさらされるという現実に変化は期待できない。

ネヴロズ蜂起は、トルコ領内のネヴロズと連携して、クルディスタン〜ヨーロッパを貫く闘いとして行なわれて来た。トルコ政府は、もちろん今年もネヴロズを禁止し、街のいたるところにドイツ製装甲車を配置して臨んだ。去年はトルコ軍の流血の弾圧が行なわれたため、今年は、西側からの監視団が入ろうとしたが追い返されてしまうという事態も生じている。しかし、どんなに弾圧が激しかろうとも、クルディスタン解放闘争は不屈に前進している。セルヒルダン（民衆蜂起）を呼びかける声は、今日もクルディスタンに渦巻いている。

（編集部）

クルディスタン情報センター新年声明

『1994年が、正当な権利の達成に向かう重要なステップを勝ち取る年になることを、クルド人民は確信している』

1994年1月、看板にはトルコでの休日の広告があふれている。「無限の色彩のパラダイス」がうたい文句で流れている。同じ文句は、バスやテレビの広告でも見ることができる。トルコは、夏の休暇を過ごすには魅力的であるように見える。海岸があり、歴史的な場所、山々、そして安い！しかしながら、トルコでは戦争が続いているのである。1993年だけで何千人もの人々が、この『汚い戦争』で命を失った。政府当局の発表によれば4000人、親クルドの反体制日刊新聞「オズグル・グンデム」によれば、7280人の男性、女性、子どもたちがこの紛争で殺された。イギリスでは、そもそもこの戦争は、結果としてクルド人に苦痛をもたらすトルコ軍とPKKとの間の衝突であると報道されている。何百もの村（トルコ人権協会の出版した年報によれば、874）が、1993年に破壊され、居住者が追い出されているという事実は、たいていの場合無視されている。

トルコの参謀長と首相は、「1994年3月までにPKKを根絶やしにする」と断言している。しかし実際には、トルコ権力は民主的反対派や報道へ圧迫を激化させている。1993年12月10日の国際人権デーには、「オズグル・グンデム」の事務所の家宅捜索を行ない、全ての記者を逮捕した。11月18日には、国連対拷問委員会が、トルコ政府を「広範かつ、習慣的、故意の拷問」で非難した。しかしながら、一週間後に、ドイツ政府は、PKKとクルド諸組織を禁止したことによって、いかがわしい過去から亡霊を甦らせたのであった。ネオ・ナチ組織が自由に活動しているのに対して、PKKの旗と出版物は非法とされてしまい、最近では5000部の月刊紙「セルヴェーブン」が押収されてしまった。クルドのコミュニティーセンターには次々と家宅捜索がなされ、閉鎖された。

しかしながらクルド人民は、PKKの支持、そしてクルディスタンで行なわれている民族解放闘争への支持を、デモンストレーションやクルド・コミュニティーセンターの占拠によるドイツ当局への再開要求のつきつけなどによって、明確に表明することでこれに応えた。フランスももちろんPKKを禁止し、幾人かのクルド人活動家らを投獄したが、他のヨーロッパ諸国でPKKを禁止するもくろみは成功してはいない。おそらく他の諸国は、より分別を持っているか、ドイツの処分におけるような厳しい法律がないのかのどちらかである。1月、PKKは貯蓄募金キャンペーンへの寄与によって、37万4740人のヨーロッパ在住のクルド人民に感謝した。これは、クルディスタンで行なわれている闘争への圧倒的支援を再度証明した。

1994年1月中旬、民主党（DEP）の国会議員アハメット・タルク、DEPのコズラック市長アブドゥラ・

PKKへの熱烈な支持を示すクルディスタンの民衆



カヤ、トルコ人ジャーナリストのラジップ・デュランを含む代表団はロンドンにいた。彼らの訪問は、DEPによる全欧キャンペーンの一環であり、北西クルディスタン（トルコ東南部）の状況や3月21日のクルドの正月、3月27日に予定される地方選挙で憂慮される事態についての見解を表明することにある。アハメット・タルクは、党は選挙で闘う予定であると強調した。しかしもし、クルド人が深刻な危険にあると感じたら、DEPは選挙から撤退するかボイコットを呼びかけるという。タルク氏は、トルコ政府がクルディスタンでの暴力の根源であり、彼の党の目的は、クルド問題がトルコにおいて自由に討論される状態を確保することにあると強調した。

トルコでは、徴兵兵士の復員の3ヶ月延期決定に対して抗議が広がっている。この結果、兵士の脱走と抗議・抵抗が報告されている。この決定は、トルコで少なくとも25万人の徴兵忌避者がいるという報告の後になされた。トルコ軍の士気の状態は、1月12日付の日刊紙「デイリー・サバー」での、歌手でありまたニュース解説者でもあるズルフ・リバネリのコラムで発表された手紙に見てとることができよう。

「私たちは、93年11月に教師徴兵で招集された700人の小学校教師です。私たちは事前の通知なく招集されたため、月賦の支払いを整理することもできず、家族は困難な状況に立ち至っています。私たちは12ヶ月の兵役につくと思っていたのですが、今、政府は15ヶ月だと言っているのです。教えてください。どこに正義があるのですか？教師という職業は、国の将来を決定するのです。私たちは問いたい。教師に価値を置かない国に未来が期待できるのでしょうか？

これが全てではありません。国は、私たち全てを実戦戦闘訓練のために選抜したのです。今、28～35才の700人の教師たちは、戦闘訓練を受けています。基礎訓練の後、私たちはPKKと闘うために東南部へ送られてしまうのです。私たちは他の人々と同じく愛国的です。そして、自分を国のために捧げる覚悟でいます。しかし、ズ

ルフ、あなたに問います。そうでない人がいますか？テロは、学校を閉鎖して教師を前線に送るほどまでに、達しているのですか？」

上記の手紙から明らかなことは、このようなトルコ軍の士気では、PKKゲリラ鎮圧キャンペーンのもと、クルドの村々を焼き払い、人々を虐待することはできないということである。トルコの町を見れば、戦争疲れの最初の兆候が始まっている。多くの良心的な反対者が立ち上がり、初期の平和運動ができあがりつつある。1994年1月17日、この国での紛争の民主的解決を呼びかける3万枚のリーフレットが、「民主綱領」(DP)によって、イスタンブール、アンカラ、そして他の諸都市で配布された。このグループは、労働組合、人権協会、専門家から成るものである。

クルド人民は、1994年が正当な権利の到達に向かう重大なステップとなることを確信している。それには、今までより以上に、トルコ軍の力に対抗するゲリラ戦士たちの勝利だけしかないことを、クルド人民は改めて認識しているのである。今年の春に、PKKは、クルディスタンで作戦を展開する3万のゲリラを持つことを目指すと宣言した。このような状況下にあっては、気の進まない

徴兵によってできた士気の低いトルコ軍は、軍事的成功を達成できはしない。

クルド人への報復として、サダム・フセインが1988年にハラブヤで遂行した大虐殺の類をトルコ政府が犯すのではないかということが憂慮される。西側諸国のトルコへの継続した支援は、そのような虐殺が起こる恐れが多分にあることを意味しているのだ。

1994年1月

クルディスタン情報センター(KIC)



クルド人民解放軍のゲリラたち(アララト山)

クルディスタンレポート

★トルコの拷問に国連の調査

国連の対拷問委員会は、尋問中そして刑務所での故意の拷問について、レポートした。この事実は、トルコが88年に批准した拷問に関する国連合意に反するものである。国連の担当委員は、内務大臣の責任を指摘している。国連は、トルコに拷問の中止を求めた。(93.12.1)

★ドイツ在住クルド人がハンスト

12月2日、ドイツ在住のクルド人たちはハンストを開始した。これは、ドイツ政府によるPKK、ERNK等に対する非合法化攻撃に反対しての行動である。ハンストは、ベルリン、ブレーメン、デュイスブルグ、フランクフルト、ハンブルグ、カッセル、ケルン、マインツ、ウルム、ヴェーネンの各都市で行われた。ハンスト者たちは声明で、今回の非合法化攻撃がトルコ政府の要請に



トルコ軍の攻撃によって瓦礫と化した村

基づいて行われたことを指摘し、またドイツ製の武器がクルディスタンで人々を殺すことに使われていることから、ドイツ政府のクルド人抹殺攻撃への加担を糾弾した。

★トルコ反テロ特殊部隊、15才の少年を虐殺

12月8日の朝、トルコ東南部クルディスタン、カルス地方の村テジレリ・フセインケントはトルコ軍によって包囲された。村に進入したトルコ軍は、家宅捜索を行なったうえ、村人に無差別発砲を行なった。負傷した多くの村人の中に、15才のイサ・コクバス少年も含まれていた。トルコ軍は傷だらけのコクバスを更に銃撃し、彼は村人が見守るなか息絶えた。負傷した村人たちはイグディールの病院へ運ばれたが、軍はこの病院を包囲し隔離してしまった。トルコのアナトリア通信は、軍の宣伝に忠実に、コクバス少年はテロリストで、軍隊との銃撃戦で死亡したと発表している。

★クルド政治囚、刑務所でハンスト

アンテップ、サグマチラル(イスタンブール)、エラズーの各刑務所で、クルド人政治囚たちはハンストを開始した。これは、刑務所や取り調べの際に行われている組織的な拷問と、この結果として生じる健康状態の悪化にもかかわらず医師の診断が受けられないことに抗議して行われたものである。(93.12.10)

★イラク領クルディスタン難民の状況

シルナック地方シロピにある難民キャンプでは、イラク領クルディスタンからの難民2000人が、アメリカ、カナダ、ヨーロッパへの入国を待ち続けている。当初キャンプに居た6万人の難民の大半はイラク領へ帰り、1600人がアメリカ、1100人がオーストラリア、400人がフランスなどのヨーロッパ諸国への入国を認められた。

(1993.12.15)

★アイディーン将軍暗殺の真相

昨年10月22日、トルコ軍のアイディーン将軍が殺害された。トルコ軍は、これを口実としてリジェでの大虐殺を行なっている。トルコ政府は、殺害したのはARGK（クルド人民解放軍＝PKKのゲリラ組織）であると主張しているが、PKKはこれを否定している。将軍のボディガードで、この時に負傷して間もなく死亡したムラート・アラールの家族は、息子はARGKに殺害されたのではないと語っており、死について重大な疑問を抱いている。（1993.12.10）

★トルコ政府、ヨーロッパへ特殊部隊を送る

トルコ政府は、特殊訓練を受けた4つのチームを国外に送り出した。これらは、PKKの指導者アブドゥラー・オジャランなどを暗殺することを目的とするとされている。特殊部隊は、拠点とする諸国の情報機関と緊密に働くこととなる。このような特殊部隊は、今までにも送り出されたことがある。（1993.12.10）

★戦争の状況

1993年12月のクルディスタンにおける戦争情勢は、以下の通り。トルコ軍兵士 375人、村落警備隊 102人、ゲリラ41人が死亡。負傷者は、トルコ政府側 157人、ゲリラ側16人。クルド人民解放軍（ARGK）は、合計 222回の攻撃を行った。また、17ヶ所でセルヒルダン（民衆蜂起）が行なわれた。（1994.1.4）

★去年のトルコ軍による村の破壊

人権組織IHDが出版した年次報告によれば、1993年一年間で 519のクルディスタンの村がトルコ軍によって無人と化された。これは、ディヤルバキル、ビンゴルなど7つの地方で行なわれた。1985年からの村落破壊は、すでに 800件を越えている。（1994.1）

★ドイツ政府、トルコでのクルド人弾圧への

ドイツ製武器の使用を否定する

ドイツがトルコに提供しているドイツ製の装甲車などがクルド人弾圧に使われているとの告発について、調査を続けていたドイツ政府は、5月1日、クルド人弾圧に使用されている証拠はないとの結論を発表した。

1992年にトルコ政府は、ドイツ政府に対して、供給された武器をクルド人弾圧に使用しないという誓約をしている。しかし、クルディスタンにおけるクルド人弾圧にドイツ製の武器が使われているという事実が指摘されており、ドイツ政府はこの調査を行なうと共に、4月7日にトルコへの軍事援助を一時中止した。

人権グループから提出された調査の結果報告を検討したドイツ国防省は、「提出された写真に基づいて、条約違反の兵器配備を立証することは出来なかった」と結論づけた。一方、ドイツ外務省は「人権団体によって提出された証拠の検討は続ける」とのコメントを明らかにしている。

提出された調査報告は、装甲車や軍用トラックの写真や目撃者の証言などからなっている。写っている装甲車の形はドイツ製に一般的なものであるが、ロシア製を含む他国の製品にも似ているとされた。また、戦闘態勢にある車両やトルコ軍によって破壊されたクルドの家が写

っていないことが、ドイツ製兵器のクルド人弾圧への使用を立証できない理由とされている。ドイツ国防省は、証拠の否定に躍起になっているようである。いずれ、軍事援助を再開するための布石であることは確かであろう。

★トルコ、ロシア政府、武器供与で合意

4月25日、ロシアとトルコの両国防相は、モスクワでロシア製兵器の購入について契約を交わした。トルコはロシアから防空システム（大砲等）と装甲車を購入することとなる。契約は、6千万ドル（約60億円）に近いが、最終的には7千5百万ドル（約75億円）を超える取引きとなる。NATOの一員であるトルコは、主要装備を西側から提供されているが、ドイツ製兵器をクルド人弾圧に使用している疑いからドイツからの供与が一時中止されたため、ロシアからの提供を受けることとなった。

これに対して、モスクワのクルド人民委員会は、クルド人大虐殺に加担するものだ、との抗議声明を出した。

〈トルコのメーデー〉 革命派諸組織 5 万人参加

5月1日、トルコのイスタンブールにあるアビディ・ヒュルリエト広場で、デブリミチ・ソル（革命的左翼）やPKK（クルド労働者党）などの革命派諸組織が5万人を集めてメーデー集会を行なった。

集会には諸組織の旗が林立し、デブリミチ・ソルなどの諸組織がマルクスやレーニンの肖像を掲げ、PKKは指導者オジャラン総書記の肖像を掲げて、クルディスタン独立のスローガンを叫んだ。これに対して約2万1千人の警官隊が街中に配備され、デモに移ろうとした集会参加者との間で衝突が起き、警官隊に対して投石が行なわれた。

アンカラでもメーデー集会が行なわれ、集会参加者たちは、労働者の給与を減じるIMFの経済措置の実施を約束した政府と帝国主義を非難した。ここでも、デモを阻止しようとした警官隊との衝突に発展した。またイスタンブールの南にあるアダナで11人、アンタルヤで3人が無届けデモを行なったとして逮捕された。

《ビデオ上映会のお知らせ》

4月24日に京都で上映会を行なった革命運動ビデオを、今後各地で上映する予定です。7月15日に広島で、秋（10月以降）には東京で予定されています。詳細が決まりましたら案内を差し上げますので、最寄りの会場でぜひご覧下さい。また、上映会を設定したい場合は、ARPまでご連絡下さい。必要な経費は、京都からの交通費のみです。

《郵便振替口座変更のお知らせ》

郵便振替システムの変更にともない、ARPの郵便振替口座番号は以下のように変更になりました。

新口座番号

00920-0-252923 ARP



ビルギット・ホーゲフェルトの書簡 『クラウド・シュタインメッツの裏切り』

事実が、今、いっそう明らかとなりました。クラウド・シュタインメッツは警察の情報要員であり、彼が私たちの逮捕のために、治安部隊を追跡させるべく手はずを整えてきたのです。この結果として、バート・クライネン駅で特殊部隊による殺戮攻撃がなされることとなったのです。クラウド・シュタインメッツの密告さえなければ、ヴォルフガングは今も生きていて、私たちは自由の身だったことでしょう。

社会の先駆的基礎を切り開く、80年代後期の革命的抵抗闘争の各戦線が下していた諸決定に関しては、私たち自身も深く認識しているごとく、危機的状況にあると言えるでしょう。様々な課題に取り組むいろんなグループの様々な議論が、私には思い起こされます。非人間的な生活状況の变革へ向けて闘うために、新たな、そして広範な運動を構築していくために重ねてきた議論の過程は、同時に多くの情報密告者、スパイを招き入れてしまう危険性を常にともなってもいました。

もちろん「下からの反権力闘争」を展望し、構築していくため、あらゆる人々やグループに対して心をオープンにしていたかという、決してそうではなかったし、集会ではじめて出会った人間とは常に疑いを抱きつつつきあうのかと言えば必ずしもそういうものでもないでしょう。にもかかわらず、この問題についての議論はいつも同じ結論へと至ってしまうのです。

つまり闘争のなかで互いに相手をより深く知ろうと思えば、より親しく緊密な間柄を築きあげる中から関係性が生まれてくるのだということです。

様々な複雑かつ矛盾していることが時としてあったとしても、それゆえにこそ信頼がおけるかどうかの判断もできるのだということでもありました。しかし、この数週間で、ヴォルフガング虐殺、私の逮捕というクラウド・シュタインメッツによってもたらされた悲しい事態があったにもかかわらず、私は今も人間どうしの信頼関係は可能である、と確信しています。

共同の生活を望む人々がいる限り、これは可能なのです。私たちが非合法活動をしていた時、クラウド・シュタインメッツとの関係は、どう間違ってしまったのでしょうか？彼を誤って信頼、評価してしまった不正確さ、ミスはいったいどこに端を発しているのでしょうか。

これは（クラウド・シュタインメッツとの接触のあとに感じたことですが）今日もなお親密な関係性があると認識している同志たちが、今彼について語らねばならない時、「火の中に手をつっこまねばならない」ほど辛く感じるほど、彼に信頼を置いていたのであるからでしょう。私はもちろん、これらの同志たちに多くの疑問を投げかけたく思っているのですが、そのほとんどは、徐々に明らかとなりつつあります。

私がバート・クライネンでクラウド・シュタインメツ

スパイ、クラウド・シュタインメツ



ツと会ったのは火曜日（6月24日）でした。そのあと宿泊する場所をさがして、いっしょにヴィスマールへ出発しました。マスコミではヴァイターシュタット（訳註①）について話し合うためにクラウド・シュタインメツと何度も電話連絡を交わしており、さらに自宅にまで招いて話し合いを持っていた、と報じられているようですがこれはまったく違います。私たちはクラウド・シュタインメツと4月に会い、その時、バート・クライネンでの会合場所を設定するよう約束したのです。

木曜日、最初のときに比べて私たちのムードは若干ながら緊張していたようでした。クラウド・シュタインメツにとって旧東独地域に来るのは、明らかに初めてのようで、どうもすべてを嫌っているようでした。彼はすべてを西ドイツの基準にあてはめて見ていたようでした。彼はいつも用心深いのですが、このとき駅では自分のスーツケースを、いつもと違って不用心に扱っていたのを覚えています。そして現場で出会った人々に対して、とても横柄な態度をとっていたように思います。彼のたち振る舞いをじっくりと見ながら、その理由を直接聞いてみたのです。「ここ（旧東独地域）で起こっていることとか人々の生活とかになんとか関心を示さないようだけど…」と。そしたら彼は「もちろん関心あるよ」、って言い返しました。私は彼にいろいろ尋ねました。例えば1990～91年、旧東独から来た人には不思議な感じがしたことなどを彼に語りはじめました。当時、色々なタイプの人たちと会話するのは、可能なことでした。その時彼らについて私はとても興奮しつつ興味を覚えたものです。多くの人々がまだ比較的疎外された状況にあって、自分たちの現状についていろいろと多くを語りながら、「西」の生活について聞こうとしていたからです。今日では年上の人以外にはそんなオープンさに出くわすことなどあまりないでしょう。しかしクラウド・シュタインメツと私との会話は、彼が私の言っていること、考えていることにあまり関心がないような気がしばしばしたので会

話をやめてしまったりしたこともあってさほど深いところにまで話は進みはしませんでした。これまでの彼との何回かの接触では、彼は討論を避けようとしていたかのような雰囲気を感じたのです。外的状況によって政治的会話が中断され不可能となった時、彼は嬉しそうでさえありました。

金曜日、私は彼に私たちの彼への印象について告げました。以前、1920年代におけるKPD（ドイツ共産党）の「誤り」——私たちはこれに反対の立場をとっていましたが——などについての討論したことがあったのですが、彼はなんにも覚えてはいないようなのでした。私は完全に混乱してしまいました。その日の議論は全て私が仕切っていました。彼は他の同志らが討論に参加できていない、と私に何度も言っていました。彼にとって重要だったからであるはずなのに、彼は私とは議論をはじめようとはしなかったのです。そればかりか私の考えについてさえ触れようとはしませんでした。

翌日以後、クラウド・シュタインメッツには距離を感じるようになりました。これにはまた、もう一つ別の理由があったのです。

同週の木曜日に、クルド人の同志たちが仲間への戦争攻撃の阻止を訴え、ヨーロッパ各地で連続占拠闘争（訳註②）を闘ったのです。この一連の闘いに対するクラウド・シュタインメッツの反応はというと、右翼的論調の新聞のそれであり、バイエルン・ラジオのコメントで述べられた「無意味なカミカゼ攻撃であり、共感を寄せる仲間を失うものである。もはや活動は禁止され、送還されるだろう。」というのと同じものでした。——私はこれにはまったくあきれてしまいました。彼の態度は「連帯」からはほど遠く、いやそのかけらすら感じられなかったからです。

今日、私たちすべてが、立ち向かってイニシアチブをとっていかねばならない諸問題に、彼はまたも再び、その政治認識の無理解をさらしてみせたのでした。クルド人の同志たちにとって、いま彼らが直面している虐殺攻撃に政治的圧力をかけ、広く大衆の注目をあつめるためには、占拠闘争以外には選択の余地がなかったということすら彼はまったく認識していませんでした。軍事的エスカレーションに対して、占拠闘争を選択したのは正しいことだったと思います。彼らは多くのものを、自らの自由を犠牲にしてこれを闘ったのです。

金曜日の夜、クラウド・シュタインメッツのやり方とはもうつきあっていくことはできないと判断しました。彼との討論は続けていましたが、その度に仲間が彼には関心はなく、相手にしてもいないようにすら感じました。これについての結論は、土曜の一日かけただけでは話さきることではできませんでした。

さて、もちろんながらこれら同志たち、とりわけ彼を長い間にわたって知っていてヴィースバーデンにいた者に聞きたいです。わけても私がここで描いたクラウド・シュタインメッツとの関わりとはまた別のまったく違った関わりが彼とあったのかどうか、ということです。

バート・クライネンでの私たちとの会合もまた、彼に

とっては普通の出来事ではなかったのは確かなことでしょう。ヴォルフガングと私が、殺戮の淵へと導かれるまで、彼が私たちとずっといっしょにいたのは明らかなのです。彼にとっては、これはどういったことであったのでしょうか？ いわゆる人を「糾弾」するに際しては、注意深くおこなわねばならないと、6月7日の記録に彼のことを記す時、あなたたち（ヴィースバーデン委員会）は、いったい何に信用を置くのでしょうか。彼の個人的な過去についてさえ本当なのかしら？彼の両親は本当にファルツの農場にいの？彼の父親は本当に自殺したの？彼はいつから情報要員となったのかしら？彼がカイザルスラウテルンにいたところから？彼が窃盗罪で監獄に収監されていたときの恐怖がプレッシャーとなって情報要員となったの？——これによって彼の刑期は軽くなったの？あるいは、単にお金が欲しかっただけなの？

あなたたちがしなければならぬことは、広くおおよけにクラウド・シュタインメッツのもたらした誤りを公表することです。さらなる警察の情報要員が運動内部に潜入し——きっと潜入しているはずよ——二度とこのような痛ましい経験を繰り返さないようにするために。

バート・クライネンでは、土曜日以降、クラウド・シュタインメッツが私たちを裏切ったとわかった時、頭はこのことでいっぱいでした。これはもちろん私の知っている他の人の件については別の問題です。より親しく知ってる人についてはなおさらのことです。クラウド・シュタインメッツが私たちを裏切ったことで、私が省みつつ考えるのは、警察が（戦術的な観点から）、なぜこの逮捕に際してその時と場所をえらんだのかということの理由が私には見つからなかったのです。私は警察を過大評価していたようです。BKA（連邦刑事局）、BAW（連邦検察局）などは、私がいつもと全然違って、木曜日の会合に一人で行ったことに大きな失望を抱いたことでしょう。だから私はクラウド・シュタインメッツが木曜か金曜のうちに、ヴォルフガングの到着が日曜だと知らせた、と推測しています。もし私の逮捕がこれに先んじて（金曜か土曜に）計画されていたものだったら、（ヴォルフガング到着を待たために）私の逮捕は繰り下げられたのでしょうか。

日曜、ヴォルフガング虐殺と私の逮捕の直前におこったできごととは次のようなものでした。

私たち3人（ヴォルフガング、私、クラウド）は駅舎内のバーにいました。3人とも午後3時15分にそのバーを出て、横に並んで歩きはじめ、地下道への階段を降り



射殺されたグラムス（バートクライネン駅の線路上）

ていきました。私は左側にいました。そのとき誰がまん中で、誰が右だったかは覚えていません。私たちが地下道通路に降りてきて右に曲がろうとしたちょうどその時警官が私に飛びかかってきたのです。— これは前にも言いました。クラウド・シュタインメッツもまたこの時「逮捕」されました。彼は私のいた場所に横になって、地面に伏せていました。彼のうしろ側にはピストルを構えた男がいて、クラウド・シュタインメッツに銃口を向けていました。私の頭に黒い覆いかぶせられるまでの間、約15メートル先にいた彼をずっと見ていました。

今思えば、これは国家の治安部局が彼を再び情報要員として元の活動に戻すために仕組んだでっち上げ演技であったのでしょうか。彼の手紙に関して、ヴィースバーデン委員会の人々の反応に私はぞっとしました。まず最初に、警察の情報要員を招き入れてしまったという過ちをまた繰り返そうとしていることにみんな気づいていないのです。今から騒いでもしょうがないのですが、クラウド・シュタインメッツは友人だったのか、同志だったのか。あるいはスパイだったのか、殺戮の道具だったのか。彼はどうやってあの現場から逃走することができたのか。これにどの程度具体的な説明があったのでしょうか。（これを私は新聞で読みました。）そしてもしも彼がこれについてすべてを「説明」することができていたのなら私はそれと反対のことなんて言うてはいなかったでしょう。— そして、それから？

これは大きな事件でした。メディアは何度も繰り返して報じました。「情報要員、RAFのコマンド機構内部に潜入す」「この情報要員はヴァイターシュタット攻撃作戦に加わっていた」などです。— 情報部自身、これらすべては事実ではない、と知っているはずですが。クラウド・シュタインメッツがヴァイターシュタット拘置所攻撃作戦に関与していたということを主張することで、国家は今一度、同志たちに有罪化攻撃を加えるべく準備しているのです。RAFは何年にもわたって声明を発表し、いかに組織構成されているかを述べ、有罪化攻撃のデマに反駁を加えてきました。しかし、BAWは前々からおこなってきたと同様のことをさらに続けようとしているのです。

私は、ときに地下で活動してきました。クラウド・シ



アウトノーメの反戦デモなどにも参加していたシュタインメッツ（円内）

ュタインメッツのような人間は、私の会ったかぎりではこの地下機構に潜入してくることなどできなかったと言えます。

私が深く知り合うようになり、共に暮らしていた同志について、これを理想化するのは愚かしいことです。他の同志とは、かつて経験したことのない親近感や暖かさを感じることができたし、こういった生活状況の中で出会った多くの人々の中で信じられないくらい多様なものでした。今でもみんなのことすべてが思い出される瞬間がいつもあります。そしてそれゆえに、みんなの生活は、夢、恐れ、希望を土台としているものだとも知っています。ここから特殊な生活環境におかれた者の特別な団結心というもの生まれてくるのです。特に、どんな結果となろうとも仲間の者すべてを守ろうという決意をするのです。たとえそれが自らの生命を代価として支払わねばならない状況となっても。

これに関連して、際限のない2局面の信頼というものがあるのです。何らためらわずに他の同志に自らの生命をあずけることのできる関係、こういう関係がしっかりと構築されていくのを認識するのです。これを知り、感じることはいつも私にとって大きなものを意味していました。

さて、私自身について少し書きます。数年前に私が本当にショックを受け、影響を受けた事件、私の人生を左右することとなったことについてです。それはポウロ・コンドル監獄でベトナム人の囚人への拷問に関する報告書を読んだときのことでした。それから死の淵にあったジークフリート・ハウスナーの最後の手記を読んだ時です。（ジークフリートは重傷を負ったまま、スタンハイム監獄へと送られました。弁護士との接見を要求したのですが、弁護士の名前と住所を書くのを妨害され続けたのです。彼は何度も書いたようなのですが、だんだんと手が震えだし、字がにじみ、そのまま死んでいったと思われます。）

ヴォルフガングが頭に銃弾を撃ち込まれてから二度と意識が戻らなかったのは、良かったかもしれません。拷問の苦痛にさらされずにすんだからです。

イルムガルト・ミュラーはもう22年間も獄中にあります。アリ・ヤンセンは重いぜんそくを患っているのに釈放されません。同志たちに対しては新たな裁判が次々と開始されています。これは人生の残りを監獄に埋め込こまんとするものです。私自身、完全な隔離状態におかれています。私はいつも国家による政治囚への非人間的な虐待に満ちた獄中処遇を目の当たりにしてきました。特にここにいる者に対しては、むき出しの攻撃がなされています。こうして私は早いうちからこのシステムのもつ性格、そしてこれに反対する者を徹底的に破壊せんとするもくろみを把握し、理解していました。

ホルガー・マインスの死（当時私は17歳でした）は私の人生に深い影響を残すこととなりました。そしてこの世界に入るようになったのです。同様に、今日のヴォルフガングの死は後世の若者に大きな影響を与えることでしょう。

「多くの声とともに、我々は多くの犠牲のうちに、激しく容赦なく闘争を闘うであろう。この闘争は未だ終わっていないのだ。ナチズム破壊と、その原理が我々の解答であるのだ。平和、自由の新しい世界の構築が我々のゴールである。」

これはブッヘンヴァルト収容所監者が記した宣誓文の冒頭部分です。— 私はつねに自分の人生と、私たちの闘争を、この伝統のうちに込めてきたのです。

ビルギット・ホーゲフェルト

93年7月22日

【訳註① ヴァイターシュタット】

93年3月27日、RAF／カタリーナ・ハマーシュミット・コマンドが、翌月から稼働予定の最新ハイテク拘置所を急襲。TNT火薬200キロをもって、コンピューター管理塔を中心に完全爆破し、数年間使用不能のダメージを与えた。戦闘詳報、声明については本紙5、6号参照)

【訳註② ヨーロッパ各地で連続占拠闘争】

93年6月24日、PKK(クルド労働者党)やそのシンパらがヨーロッパ各地のトルコ大使館／領事館やトルコ関連機関／施設に対し連続同時多発的占拠、襲撃戦闘を敢行し、トルコ国家によるクルディスタンへの戦争攻撃の即時停止を訴えた闘い。

—〈解説〉—

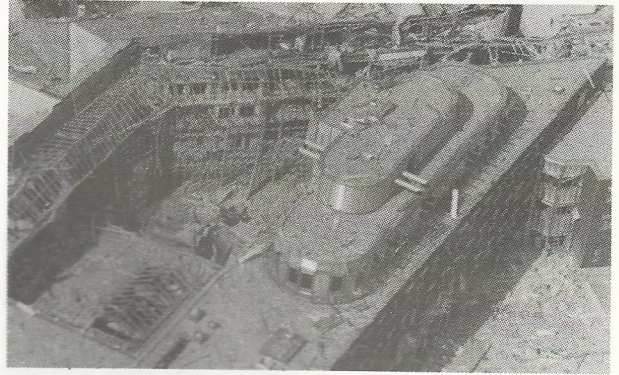
93年6月27日の、ドイツ内務省直轄の対テロ特殊部隊GSG9によるドイツ赤軍派兵士ヴォルフガング・グラムスの射殺と同ビルギット・ホーゲフェルトの逮捕については、本紙第7号に詳しく紹介した。シュピーゲル誌による「射殺疑惑」記事により明るみにて、政府の射殺隠蔽工作を正当化するために、以後さまざまな「調査機関」による「科学的検証」がすすめられてきた。この「調査」に関するこれまでの経過とRAFの状況について振り返る。

「グラムスは自殺」と結論

シュピーゲル誌(93年7月5日号)が、バート・クライネン駅にいわせた警官などの証言から「RAF兵士射殺の疑い？」とした記事により「グラムスは自殺」と発表していた連邦検事局BAWは、局長フォン・シュタール、さらには連邦内相ザイタース辞任などの一大スキャンダルに揺れる中、地元シュベリン検事局などを通じ「事実調査をおこなう」と約束。「中立・公正な調査をおこなうため」にスイス・チューリッヒ警察が依頼を受け「真相究明」にあたっていた。

93年11月18日、メクレンブルク・フォアポメルン州法相ヘルベルト・ヘルムリッヒは数百ページからなる調査報告書を公表した。これによると「射殺と断定するにはGSG9ネヴツェラー隊員のジャケット右ソデに血痕が付着していなければならないが、その形跡が見当たらないためグラムスは自殺したもの」と断定される」などとし

昨年3月、RAFによって爆破され使用不能となったヴァイターシュタット拘置所



て射殺の事実にはなかった、と結論している。またシュピーゲル誌記事の発端となった「警官の証言」については「警官は混乱した現場で動揺し、記憶が混乱していた」とし、その他の身元不明の証言については全面的に否定され、つづく1月13日、「グラムス自殺」とする最終調査報告がなされた。後日、グラムスの両親は、この「調査打ち切り」に抗議する声明を発表している。

逮捕されたビルギット・ホーゲフェルトは、事件後フランクフルト／プロイニングスハイム刑務所に一時収容された後、現在はビーレフェルト・ブラックヴェーデ刑務所に移送され、24時間監視のもと、隔離拘禁を受けている。連邦検事局はホーゲフェルトを、過去のRAFの軍事作戦行動に関連してティートマイヤー大蔵次官(現ドイツ連銀総裁)暗殺未遂／1988年、ヘッセン州ヴァイターシュタット拘置所爆破／1993年などの殺人4件、殺人未遂6件の容疑で起訴している。

RAFの分裂

調査報告では現場にいわせたはずの第3の人物、クラウス・シュタインメッツについては何ら公表されず、真相は未だ明らかとなっていない。ただ彼が70年代後半から十数年にわたりドイツ情報当局憲法擁護庁(VS)の情報要員として赤軍派内部に潜入していた事実は、マスコミでセンセーショナルに報じられた。今回掲載したビルギット・ホーゲフェルトの第2書簡では、前回触れられなかった彼の存在について述べられている。この事件をめぐるのはRAF、ビルギッテ・モーンハウプトらRAF獄中者、また獄中者支援グループらの間で「潜入スパイ問題」「RAF獄中者の政府との釈放交渉」「RAFの武装闘争方針」などについて多くの声明が発表された。「RAF分裂」との情報が錯綜し、ドイツ左翼全体にも少なからぬ影響を与えている。本紙では今後も継続的に状況を紹介していく予定であるが、この間、新たに発表されているRAF声明については、以前本紙に掲載した「RAF武装闘争放棄声明」へと至る過程で声明とは別形式で発表された、いわゆる「RAF8月文書」(92年8月)を把握しておかねば理解できないかと思われるので、今後追って翻訳、紹介していきたい。また同時にRAF獄中者らの書簡などについても同様に随時掲載していく予定である。

センドロ・ルミノソ 年末年始の大攻勢を行なう

1993年12月3日は、ペルー共産党（センドロ・ルミノソ＝PCP/SL）の指導者ゴンサロ議長（アビマエル・グスマン）の誕生日である。そしてまた、革命的武装勢力の結合たる人民解放軍（PLA）の統合記念日でもある。この日と前後して、武装闘争が連続的に闘われた。

11月19日、PLAは首都リマのサラデ地区にある銀行を爆弾を使用して攻撃した。また、更に強力な攻撃が、ラ・モリナの中産階級居住地区のカマチョ広場に面した商業センターに敢行された。翌日には、サン・ボルハ地区の内務省近くで車爆弾を炸裂させた。この「安全地区」に対する攻撃は反動主義者たちに衝撃を与えた。同日、PLAの一分隊は、リマ南部パチャカマクにある警察署を攻撃。

12月2日、政府系新聞「エル・ペルアーノ」の事務所は強力な爆弾によって破壊された。その夜、リマの3つの丘、サン・クリストバル、エル・ピノ、サン・コスメには一連のセンドロ・ルミノソの闘いを祝して松明が燈された。3日の朝にはPLAゲリラ部隊が、リマ郊外の自衛委員会（SDC）に対して砲火を開いた。「ロンダス」として知られるSDCは、反革命準軍事組織として政府軍によって組織されている。この2日後には、サンタ・アニタでマイクロバスが爆破された。

12月中旬から新年にかけては、毛沢東生誕百周年（12月25日）を記念して一連の武装闘争が敢行された。12月16日、PLAの大分遣隊はリマのエル・アグスティー地区にある第30軍管区のパトロール部隊と交戦した。また時を同じくして国立銀行の支店が接収された。24日の夜には、アヤクチョとワンカベリカの村で送電塔を倒壊させる。リマでは、ロス・オリボス、コマス、サン・マルティン・デ・ポレスの銀行支店を攻撃した。

ボリビア国境に近いペルー南部の村ワンカネでは、軍隊の募集事務所と村役場をPLA部隊が攻撃。ラ・メルセでは、政府軍輸送部隊を待ち伏せ攻撃する。

これら一連の行動は、世界中の共産党が毛沢東生誕百周年を勝利的かつ熱烈に祝っているのと時を同じくして行なわれた。

12月28日に行なわれた軍事行動は、リマのDINCOTE（反テロ特殊部隊）本部に強烈な損害を与えることとなる。

農薬とダイナマイトによる強力な混合爆薬を積んだ2台のマイクロバスが、リマのアルフォンソ・ウガルテ通りに現れる。ちょうど28日午前5時50分のことであった。同時に、ゴンサロ議長、共産党、ペルー革命の名のもとに、PLA部隊は国家警察第7管区署を攻撃した。そこにはDINCOTEが本部を置いているのである。もちろん反動政府の諸施設がそこにはあり、情報センターの機能を持っている。つづいて第6管区に対しても攻撃が開始された。

センドロ・ルミノソの攻撃で
DINCOTE本部の壁は
完全に崩れ落ちた



攻撃開始に動転した警官どもは、ただ訳も判らずに走りまわり、狙いもつけずに発砲するばかりであった。そして、660ポンドの爆弾を積んだ車が近づいてくるや、一目散に逃げ出したのである。この爆弾攻撃によって、一瞬にして45フィートの壁が崩れ落ち、アルフォンソ・ウガルテとエスパーニャ通りの角には巨大な穴を残したのであった。傍らにあった警察装甲車は、爆発の結果完全に燃え尽きてしまった。

闘いは、新年に入っても怒濤のごとく続けられた。12月28日、リマのサン・フアン・デ・ミラフローレスにある発電所の一部を仕掛けたダイナマイトで破壊した。また、ラ・ビクトリア、リンセ、サン・イシドロでは、銀行を標的として攻撃がなされた。日暮れには、コマス、アグスティーノ、カラバイジョの丘の上に、共産主義のシンボルである鎌とハンマーの染め抜かれた赤旗が高く掲げられたのであった。

29日の夜、リマのラ・ビクトリア地区にある中国系企業の前で車爆弾を炸裂させる。（センドロ・ルミノソは中国大使館と現在の中国の権力者と結び付いた関連施設を目標としている）。これは、1976年の毛沢東の死後に反動クーデターを企てて中国に資本主義を復活させた鄧小平を頭目とする修正主義者たちへの断固たる反対の意志表明として行なわれた。30日には、再度、リマの銀行への攻撃が敢行された。翌日には、サンタ・アニタの電話公社前で仕掛けられたダイナマイトが爆発している。

ペルーの保安部隊は、新年の攻勢を止めるためにパトロールを強化したが、しかしこれもゲリラ部隊による大胆な攻撃を妨げることはできなかった。年が明けてからも、リマのサン・マルティン・デ・ポレスの銀行が攻撃される。爆発音は、首都の隅々まで響きわたった。

エル・アウグスティーノにあるエル・アレナルの丘にはカマとハンマーをかたどった明りがともされ、闘いの新年を照らし続けたのであった。



サパティスタは要求する

以下の文書は、1994年3月2日の一回目の対話の結果に基づいて、サパティスタ民族解放軍総司令部先住民民族地下革命委員会（CCR I-GC/EZLN）とメキシコ政府によって署名された合意文書である。CCR I-GCは、EZLNの諸要求に対する政府の回答は、いままでのところは、平和を見出す真の関心を反映したものであると認識している。交渉の場に出席した19人のEZLNのメンバーは、ラカンドンのジャングルへ帰った。そこで、この予備合意について討議し、合意内容が満足いくものであるか確認するために先住民社会で協議する予定である。

★サパティスタの要求

1. 政権つまり各々の提案の選択されうる真の自由、そして、大衆の意志の尊重を求めて競合する全ての政治的組織のための、平等な権利と義務を伴う自由かつ民主的な選挙を、我々は要求する。民主主義は、全ての先住民、非先住民にとって根源的な権利である。民主主義なくしては、自由、正義、尊厳はなく、また、尊厳なくしては、全てがないのだ。
2. 自由かつ民主的な選挙を保証するには、不正選挙で権力の座についた連邦幹部と政府職員を辞職させることが不可欠である。それらの肩書は多数の合意によるものではなく、むしろ奪い取ったものなのである。従って、過渡的な政府を形成する必要がある。
3. EZLNを交戦中の勢力として認識すること。
4. 中央集権制を廃し、全ての地方、先住民社会、自治体が政治的、経済的、文化的な自治性のもとに、自らを統治することを承認する新連邦協定。
5. チアパス州の総選挙と全州域の政治勢力の合法的承認。
6. 全てのチアパスの地域社会が電化され、チアパスの石油の商品化によって得られた税の一定の割合が、全チアパス在住者のために、工業、農業、商業、社会整備事業に充てられることが、最も重要である。
7. アメリカ、カナダとの間で交わされたNAFTAの改訂。そこで述べられていることは、先住民のことを考慮していない。なおその上に、それは死刑宣告を

意味する。何故なら、何らの労働資格も含まれていないからである。

8. 憲法第27条は、エミリアノ・サパタの本来の精神、すなわち、土地はそこで働く先住民と農民のものであり、大地主のためにあるのではないことを尊重せねばならない。
9. 政府が、自治体の首都に、全ての患者を看護する専門的な医者と十分な医薬品を備えた病院を建て、小さな地域社会には、訓練を受け、正当な給与の支払われる厚生担当者のいる地方診療所を建てる。
10. 先住民は、自ら管理運営する独立ラジオ放送局を通じて、地域、地方、州、国家、国際レベルの情報の権利を保証されること。
11. メキシコの全ての地域社会に、電気、水道、道路、下水施設、電話、公共交通機関といった必要な環境を備えた住宅が建てられるよう、我々は要求する。そしてもちろん、テレビ、ストーブ、冷蔵庫、洗濯機などといった都市生活の恩恵が与えられること。
12. 我々は、先住民地域での識字化を要求する。このためには、無料の教材を備え、人民に奉仕して私欲に走ることをしない大学卒の教師のいる小学校と中学校が、我々の地域には必要である。
13. 異なる種族の諸言語は公認され、小、中、高、大学各々で教えられること。
14. 先住民たる我々の権利と尊厳は尊重され、文化と伝統が認められること。
15. 我々先住民が、今日に至るまでの長きにわたって耐えてきた差別待遇やさげすみを受けることを、我々は望まない。
16. 先住民たる我々は、自治管理が認められるよう要求する。我々はもはや、国家や外国勢力の意志に服従させられることを望まないからである。
17. 司法は、習慣と伝統に従って、不法で腐敗した政府からの干渉なしに、先住民社会自身によって執行されること。
18. 我々は、都市部、農村部両方の全ての労働者に、公正な賃金の品位ある仕事を要求する。我々の兄弟たちが、麻薬取引、犯罪、売春などの悪事に行きつかなく

でもすむようにするためである。

19. 我々は、自らの生産物の公正価格を要求する。このために、我々を食い物にする悪党たちに任せることなく、市場で自由に売買することを、我々は必要とする。
20. メキシコからの富の搾取、そしてとりわけ、共和国の中でも最も豊かな州であり、かつ日々深刻化する飢えと悲惨に苦しむ州—チアパスからの富の搾取は終わらなければならない。
21. 信用貸であろうと割賦であろうと、納税のために高利に貸し付けられているあらゆる借金は、メキシコ民衆の貧困ゆえに返済できないものとして取り消されることを、我々は要求する。
22. 都市や農村の両方で、何千人もの我が同胞たちの死を引き起こしてきた飢えや栄養失調がなくなることを我々は求める。全ての地域社会に、連邦、州、自治体当局によって経済的な補助を受ける協同ストアーを置き、そこでの価格は公正なものとするべきである。
23. メキシコならびにチアパス州の刑務所に不当に囚われている、全政治囚と貧しい人々の即時無条件釈放を我々は要求する。
24. 権利を守るために組織された農民を、ただ脅したり処分したり、強盗を働いたり、抑圧し攻撃するために、連邦軍と司法ならびに公安警察が田舎の地域に入ることを禁止するよう我々は要求する。
25. 衝突の期間中、空爆と連邦軍兵士たちの攻撃によって物的損害を被った家族に、連邦政府が補償を行なうよう要求する。また、一般市民であれ、サパティスタ勢力であれ、戦いの犠牲で未亡人や孤児となった者たちに、補償が与えられることを要求する。
26. 我々先住民族農民は、平和かつ平穏に暮らすことを希望する。そして、自由への権利と尊厳ある人生に従って生きられるよう要求する。
27. 合法かつ平和的闘争が抑圧され弾圧されたために、武器を取る以外に我々が組織するのを許さなかったチアパス州の刑罰規程は削除されること。
28. 州に支援された地方の専制者による先住民族社会の追放を終わらせるよう、我々は要求する。全ての追い出された人々が自由かつ任意に彼らの元の土地に戻り、損失が補償されるよう要求する。
29. 先住民族女性請願条項；我々先住民族農民女性は、政府によって長らく無視されて来た緊急の要求の即時解決を要求する。
 - a) 産婦人科医師のいる産院
 - b) 全地域での保育設備
 - c) 農村地域の全ての子供たちに、ミルク、コーンスターチ、米、トウモロコシ、大豆、油、チーズ、玉子、砂糖、スープ、麦などの十分な食料を。
 - d) 地域の子供たちのための、設備の整った共同調理場。
 - e) たくさんの家族が頼る各地域での共同製粉施設。
 - f) 鳥、ウサギ、ひつじ、豚の飼育場。
 - g) 製パン設備の計画
 - h) 機械設備、必要物資の整った専門職員のための作

業所。

- i) 公正価格で工芸品を販売する市場。
 - j) 女性のための技術訓練学校。
 - k) 保育所と母子学校。
 - l) 輸送・交通のための充分な諸手段。
30. パトロシニオ・ゴンザレス・ブランコ・ガリド、アブサロン・カステジャノス・ドミンゲス、エルマル・セツァー・Mが政治的に審理されるよう要求する。
 31. 我々は、E Z L Nの全構成員の生命が尊重されるよう要求する。また、E Z L Nのメンバー、戦闘員、シンパ、協力者に対しての訴追や、いかなる行為も行わないこと。
 32. 人権擁護のための組織、委員会は、全て独立したものであること。
 33. 正義と尊厳に基づいた平和のための委員会が形成されること。この委員会は、これらの合意の遂行と実施を監視する。
 34. 衝突の犠牲者のための人道的救済の道が、先住民族社会の信を受けた代表团によって開かれること。

今回掲載した合意文書は最終的に合意に至ったものではなく、E Z L Nの要求項目全文と考えられる。政府はサリナス大統領の辞任とカステジャノス元チアパス州知事の裁判を受け入れなかったので、掲載した項目の2と30は合意に含まれないと解釈できる。

2月21日から3月2日まで行なわれた和平交渉の仮合意は、先住民族地域で討議された上で正式合意となるが、3月23日に与党PRIの大統領候補コロシオが暗殺された後、和平対話そのものが一時中止されていた。しかし、5月4日グアダルルーベ近くのサパティスタの解放区でE Z L N、ルイス司教、カマチョ政府特使との会談が持たれ、交渉の再開が決まった。二回目の和平交渉は数週間の内に開始される予定である。

チアパス州の現状について書かれた「チアパス：嵐と預言」を掲載する予定であったが、日本革命的共産主義者同盟(JRCL)の機関紙「世界革命」に同文が掲載されたので、本紙定期購読者のみに配布するインフォメーションに採録する。希望者は、定期購読を申し込むか、もしくは80円切手2枚を同封しARPまで申込を。

世界革命運動情報

 **BURST CITY**
For Revolutionary Resistance

★発行 A. R. P

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★FAX 075-781-1253

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替口座

00920-0-252923 ARP

本号 300円